

## <資料>

### 「教養」としての教育学を学修する意義 － 授業実践における学生の視点からの検討 －

白石 淳\*

抄録：大学における教育課程の編成について、大学設置基準に「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない」と示されている。教養教育に関してはさまざまな議論があるが、多様な学生への対応という点で以前よりもその重要性が増している。しかし実際に教養教育科目の授業を履修した学生にとって、教養教育科目の授業はどのようなことに有益性をもたらしているのだろうか。この疑問が、この課題を設けた理由である。そこで、教養教育科目「教育学」の授業実践例を取り上げ、教養教育の果たすべき役割を考察することを目的とした。

教養教育科目「教育学」の授業は、学生に多くの学修効果を与えている。教育学を学んだ結果、学生は、教育の必要性の理解、子どもを取り巻く環境の理解等を深めていた。また、心理学等の専門とする学修の基礎的な知識を修得することができるなど、大学におけるこれからの学びや生活に教育学の学修は役立つものと学生は考えている。

キーワード：教養教育、教育学、教育方法、学修の意義、授業評価

#### 1. はじめに

教育基本法第7条に、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」と、大学の目的が定められている。具体的な教育課程については、大学設置基準第19条において規定され、教養教育については「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない」と示されている。この幅広い教養を担うのが、教養教育科目<sup>1)</sup>を中心とした授業であり、この意義・重要性については、従来からさまざまな議論がなされてきた。とくに設置基準が大綱化された頃、国際化が叫ばれ、一般教育を含めたカリキュラムのあり方などの研究が数多く行われた<sup>2)</sup>。

そもそも、我が国の大学における教養教育は、戦後、「アメリカ教育使節団報告書」の提言により導入されたが、その後、改革が繰り返されてきたという経緯がある

\*看護福祉学部臨床福祉学科社会福祉学講座

と吉田(2014)は指摘している。文科省生涯学習政策局政策課によると、新制大学は、一般的、人間的教養の基盤の上に、学問研究と職業人養成を一体化しようとする理念を掲げ、このために一般教育を重視し、人文・社会・自然の諸科学にわたり豊かな教養と広い識見を備えた人材を育成することが目指されてきたのである。そして年月を経て、平成3年に大学設置基準が大綱化され、各大学の自主的な教育課程の運営に委ねることになり、大学の教育全体が見直されることになった。これは「学問のすそ野を広げ、様々な角度から物事を見ることができる能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材を育てる」という教養教育の理念・目的を、一般教育科目だけでなく、広く大学教育全体を通じて実現することを目指すものであった。その一方で、同課が示す次のような課題を含有することになった。「教養教育の位置付けをあいまいにしたまま、教養教育に関するカリキュラムを安易に削減した大学が存在すること」「教養教育に対する個々の教員の意識改革が十分に進んでおらず、ややもすれば専門教育が重要で教養教育を面倒な義務と考える教員が存在すること、また、教養教育を担当する教員が積極的に取り組む

インセンティブが不十分なため、具体的な教育方法や内容の改善が進まないこと」「教養部に代わって設置された教養教育の実施組織の学内での責任体制が明確でなく、その結果、教養教育の改善が全学的取組と明確でなく、教養教育に熱心に取り組む意欲が乏しいこと」である。しかし教養、とくに初年次教育の重要性については、山下（2013）は「初年次での学びがその後の学びを左右する」と、佐野（2006）は「適応の継続効果がある」と示している。そして「教養教育は、多様な学生への対応という点で以前にも増して重要になっていることは確かであり、他方で、スキル化・リメディアル化に終始しない教養教育の理念と内容を考えることが必要」と吉田（2014）はスキル化・リメディアル化への懸念を指摘するなど、その内容、位置づけを明確化、計画的にするよう求めている。しかしこの重要性・意義等を踏まえつつ、教養教育科目の授業を実際に担当している著者は、実際に教養教育はどのように学生の学修に有益性をもたらしているのかと考えることがある。教養教育科目の授業は、学生に具体的にどのようなことに役立っているのだろうか。授業評価を行い学修の満足等を測るものの、本当はどうなのかという疑問が残る。これが、この課題を設けた理由であり、著者自身への問いでもある。

そこで、教養教育のあり方については、さまざまな視点により研究、議論がなされていることは重々承知しているが、本稿においてはその議論とは異にし、現に行われている教養教育の現実的な問題に対峙するために、一つの授業実践例を取り上げ、学生の視点に立ち、教養教育の果たすべき意義を検証することに本稿の目的を置いた。実践例を報告し、教養教育の意義・内容を議論する基礎的な資料に資することとしたい。

## 2. 授業の目標

教養教育では何を学ぶのか。山下英明（2014）は「考える力」と示すなど、さまざまな目標があげられている。本稿で取りあげる授業実践例を展開する大学では、「一般共通に求められる知識や思想法等の知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力を徐々に身につけてもらう」ことが、その目的となっている。これにもとづき実践例である「教育学」の授業の「ねらい」と「目標」は、次のとおり掲げられている。

### 【授業のねらい】

みなさんは、小学校、中学校、高等学校等と教育を受けてきました。また今も大学という教育機関で学んでいます。このように誰もが十数年間の長きにわたり生活の中心として位置づけられてきた教育ですが、改めて「教育、学校とは何か」と尋ねられたらどのように答えますか？この答えを探索するのがこの授業です。この授業では、「教育の理念」「教育の歴史・思想」「教育課程」について学習します。この学習を通して、一緒に「学ぶ意義」「教育」について、考えましょう。

このようなねらいを記し、自らが学んできた小学校、中学校、高等学校の教育を改めて見つめ、教育の意義を自ら考え、掴むことにある。そして到達すべき目標は、次の4点である。

### 【授業の目標】

- (1)今日の「教育における課題」を指摘でき、「教育とは何か」ということを自分の言葉で説明することができる。
- (2)教育を成立させてきた教育の歴史及び思想を理解でき、教育の意義を深く考え、今後の学びに役立たすことができる。
- (3)今日の教育課程の内容を知り、その編成の意義、編成の方法を知り、学校を理解する。
- (4)社会のなかで生活するうえで、「教育の重要性（必要不可欠であること）」を認識することができ、今後の学びに役立たすことができる。

このように、単に教育学の内容を学修するのみではなく、「学校を理解する」や「教育の意味を問い直し、自分自身としての答えを見出す」ことに目標を置くとともに、教育の意義、教育の重要性を理解して、「大学等における今後の学びに役立つようにする」ことである。この授業のねらい・目標を達成するために授業が展開されるが、具体的な授業の内容は以下のとおりである。

### 【授業展開】

- |  |
|--|
| <p>■第1回目【教育を学ぶ意義】教育学を学ぶ意義、学ぶ方法などを学びます。<br/>(1) 教育学を学ぶ意義 (2) 学ぶ方法 (3) 教育の理念の形成</p>  |
| <p>■第2回目【教育の必要性とその理念】人間のライフストーリーを踏まえた上で、教育の必要性を認識し、教育の理念（意味）を学びます。(1) ライフストーリーと学習の機会 (2) 成長を助ける教育の営み (3) Educationの意味</p>                                    |
| <p>■第3回目【教育・義務教育の始まり】古代からの教育の歴史（西洋他）を概観しながら、その教育思想を時代背景を踏まえて（宗教、政治と教育の係わりなども含みながら）学びます。(1) 教育が必要になった理由 (2) 教育の義務が生じた理由</p>                                   |
| <p>■第4回目【日本の戦前までの教育】日本の明治時代（含む以前）から戦前までの教育の歴史、その思想を学びます。(1) 明治5年までの教育 (2) 学制による学校制度の整備 (3) 明治時代・大正時代の教育の特徴 (4) 教育勅語による教育</p>                                 |
| <p>■第5回目【日本の戦後の教育（新しい教育への転換）】日本の戦前の教育と戦後の教育の理念、思想の相違点を眺めながら、戦後の教育の特徴（理念、思想）を学びます。(1) 戦前の教育の終焉 (2) 戦後の教育への期待 (3) 憲法13条、26条の内容と理念 (4) 戦後の教育の理念・思想、権利としての教育</p> |

|  |
|--|
| <p>■第6回目【子どもの権利と最善の利益】古代の子ども観を踏まえて人権の思想、歴史を概観し、子ども（児童）の権利条約の内容を学びます。（1）古代の子ども観と人権思想の高まり（2）子ども（児童）の権利条約（3）最善の利益の保障</p>            |
| <p>■第7回目【教育を受ける権利と権利の意味】主体者からみた教育への権利、権利の意味について学び、学校現場における課題（体罰、障害のある子どもの教育など）についても学びます。（1）教育への権利（2）権利を考える上で重要なこと（3）学校における課題</p> |
| <p>■第8回目【教育基本法と教育課程】教育基本法を学び、今日の学校教育の教育課程を形成させている基盤を理解します。（1）法律主義（2）教育基本法（3）教育の目的と学校教育の教育課程</p>                                  |
| <p>■第9回目【「生きる力」と教育課程】教育課程の中心となっている「生きる力」の内容を学び、教育課程の編成について学びます。（1）生きる力を育む教育（2）教育課程の編成（3）新しい方向性・学力の向上（海外の事例を含む）</p>               |
| <p>■第10回目【地域・家庭・学校の連携と教育課程】今日の地域・家庭の現状を踏まえつつ、地域・家庭とのかかわり・連携を重視した教育課程について学びます。（1）子どもが育つ環境の重要性（2）地域・家庭の現状（3）地域-学校-家庭と連携した教育課程</p>  |
| <p>■第11回目【特別な支援を要する子どもの教育課程と課題】特別な支援を要する子どもの現状を踏まえつつ、学校における教育課程について学びます。（1）特別な支援を要する子ども、学校・学級の支援の現状（2）教育課程の編成と方法と課題</p>          |
| <p>■第12回目【教育の理念と教員の資質能力】免許制度を踏まえうえて、高校における教師を取りあげ、必要とする資質能力について学びます。（1）教育理念と免許主義、資質能力（2）荒れた高校を建て直す教師の実践から考える教育の理念と資質能力</p>       |
| <p>■第13回目【教育課程と今日の学校教育の課題】教育課程の編成を踏まえうえて、今日の学校に生じている課題について学びます。（1）学習指導要領・教育課程の編成（2）義務教育における課題</p>                                |
| <p>■第14回目【学校教育の制度と教育課程】各国の教育制度を踏まえて、学校の教育課程を概観します。（1）学校教育の制度（2）教育課程、編成（3）教育改革の動向</p>   |
| <p>■第15回目【まとめ】今までの授業の積み重ねをもとに、教育の理念・学校の教育課程について学びます。（1）学ぶという意味（2）未来に向けての学びとなるように（3）学校という営み</p>                                   |

授業展開では、可能な限り多面的に教育の問題を捉えられるよう工夫をした。前半は、教育の基本的事項である「教育の理念」「教育の歴史」「教育・子どもに関する権利」等の学修、後半は、「家庭・地域」「教育制度・教育課程」「学校・教員」等の学校に係る具体的な事項をテーマとして取りあげ、学修を深められるようにした<sup>3)</sup>。

### 3. 授業と授業評価

授業評価は、今日では多くの大学で実施されている。この授業科目についても授業評価が実施され、評価項目は大まかに次の項目である。授業に関する内容として「目的、ねらいの理解」「内容の理解」「知識・技術の修得」等であり、それぞれ5段階により評価が行われる。

また、学生の態度・取り組みとしては、「授業中のマナー」「予習・復習の取り組み」、教育方法としては「話し方、聞き易さ」「説明のわかりやすさ」「理解度を確認しながらの授業展開」「興味や関心のための工夫」「補助教材の利用」等である。授業評価では、教員の教育技術の他に、内容を理解し新しい知見の修得の有無が問われていることも多いが、学生が修得した知見が具体的にどのようなことなのかを示すことは難しく、知識・技術の修得などは別としても、学生の真の学修の成果内容を汲み取ることはなかなか困難である。すなわち学生は、この授業を受講して何を学修・修得したのか、学修は何にとって有意義になったのかということを示す機会が希少である。それゆえ、実際の学生の学修成果については、なかなか表出することはないし、まして教養教育科目は専門教育科目に比してそのことは難しいのではないか。しかし授業は「教養教育」として学生に意義あるものとするためにも、その多様な有益性を実証すべきであると考える。そこで、次に授業終了時に学生が授業から何を学修したのかについて、学生の実際の回答を示しながら考察を加えることとする。

### 4. 学生の学修からみる意義

授業から学生が学修・修得したことは、どのようなことであつたのだろうか。授業評価では、なかなか現れることのない具体的な学修・修得の内容を調査し<sup>4)</sup>、回答をキーワードにより整理して以下に示す。

#### (1) 教育の目的・歴史関連の学び

教育に関する「目的」「役割」「あり方」「意味」、その関連のキーワードが回答にあるものを、ここでは示す。これは授業の目的等の基本的な事項を学ぶ機会に、この授業が有益であつたことを示すキーワードである。

- 教育の目的やその歴史を学んだ。とくに教育の目的を考える機会になったと思う。
- 今まで考えたこともなかった学びの意味、教育の意味などを考えることができた。
- 社会における教育の役割を知ることができた。
- 教育の実態、あり方などを授業では学んだ。
- 学校は成績がすべてだと思っていたが、教育の意味を改めて考えることができた。
- 勉強する意味を考えることができた。
- 勉強の仕方というか、教育の意味などの捉え方を変えることができた。
- 教育というものは、学ばれるものではなく自ら学ぶものだと理解した。
- 教育は何のためのあるのか、その意味、あり方などを考えることができた。自分自身の問題であることがわかり、大切にしていきたいと思った。
- 今まで自然と受け入れていた教育に対して「なんで？」と理由を突き詰めていくのが面白く勉強になりました。教育の意味など、わかっているつもりだったことを全然わかっていなかったです。

○私たちは幼稚園もしくは小学生からずっと教育を受けてきているが、いまいち、何のため、誰のため、何に役立つのかわかっていなかった。理科の化学式とか、テスト以外使わないし。でも先生の言葉以外にもビデオで色々な事を思っている人の意見を知ることで、それぞれが自分なりの教育の意味や答えを見つける手がかりになると思った。

「授業の目標」に掲げられている教育の目的・意味、歴史のみならず、学ぶ意味をこの授業から考えていることがわかる。「何のために学ぶのか、教育を受ける意味について人から指摘されるまで深く考えることはなかなかないかもしれません。社会問題の課題に向けて勉強になりました」などと示されている。今まで学校に通い学んできた教育であるが、その意味・役割・あり方についてここで改めて真剣に考えていること、自分でその答えを出そうとしていること、これからも大切にしていくことなどが、ここでは示されている。そして、これからも問題意識を持つことが必要であること、これからも学びを続けていく必要性があることを認識している。

## (2) 子ども・先生関連の学び

教育学の授業であるので、子ども、先生に関する内容についても、授業で取りあげられ学修をしている。ここでは「子ども」「先生」に関連するキーワードがある回答を取り出し整理をした。子どもに関する、先生に関する実態の理解などである。

○生徒の実態やその現状を学ぶことができました。  
○多くの子ども達がどのような状況にあるか知った。  
○子どもの現状について知ることができた。  
○子ども、学校の現状を学んだ。自分が生徒の頃と変わっていることも知った。  
○子どもを一番に考える大切さを学んだ。  
○先生が子どもを大切にすることの重要性。子どもがどんなつらいことを抱えているとも、絶対に大切にすべきなんだということを学んだ。  
○学校のなかでの子どもの現状を学び、子どものための先生の仕事を知ることができた。  
○大人というものにあまり良い印象を持っていなかったが、子どものことを思う大人、先生を知った。  
○先生の抱える課題、役割、そして生徒を思う先生の熱意などを知ることができた。  
○いろいろな先生の考え方、生徒の現状、気持ちなどを理解できた。「学校、学ぶ上での主役は生徒だ」ということを忘れずにこれからも勉強をしたい。  
○将来、教師になりたいが、こんな先生になれればよいということを思った。

子どもや先生の現状を理解することがなされているが、そこから多くのことを発展的に深く学修している。また現状の認識から、子どもを大切にすること、生徒の権利を保障するために教師が存在すること、生徒の気持ちなどを、ここでは学んでいる。「自分の子どもの頃とは…」などと、比べながら学んでいることもある。「VTRなどで、自分の知らない子どもの世界があるなと思いました。色々な視点で子どものことを知れたと思います。私もあの環境なら、ああなっていたなと良く共感できました」と、自分の子ども時代の状況とも重ねながら、深

めていることがわかる。「自分の生徒の頃を思い出し、その学校、学びには意味があったことがわかった。先生の仕事もわかるようになった」と、教育の意義を考えている。また、「子どもや人を変えることができるのは、やはり人なんだと学びました。自分と自分以外のもののためにあるのが教育だと思いました」と教師の重要性、理想としての教師像、子どもの視点による教育の意味を含めながら考えている。

## (3) 教育の重要性関連の学び

教育の大切さ・重要性の認識についても、学生は深めている。「重要・大切」「必要」と示している回答から考える。教育を「重要ではない」と思っている人は皆無ではないかと思うが、日頃から重要と認識することは少ないのではないか。とくに現に学校に通学し日常的に学んでいる場合には、一種の慣習・義務的な感覚となり、その重要性を認識する機会は少ないものと思う。ここではこのことを改めて認識する機会となっているが、教育のどの点に重要性を感じているのであろうか。

○教育の重要性を知った。  
○教育の必要性という重要性がわかった。成長することは教育、学校があるということを改めて認識した。  
○教育の大変さや大切さがわかった。  
○教育の必要性、重要さがわかりました。  
○教育ってすごく大切だと思いました。養育環境や親との関係も大切で、欠けてはならないものなんだと思います。  
○子どもが教育というものに示されて生きて行くことが、どれだけ重要なものなのかが理解できた。  
○生きていくために、成長するということと教育との関係、その重要性を知ることができた。  
○教育の重要性がわかった。大学における教育も、大切にしていきたい。これからの学びも大切にしたい。  
○今も学んでいるが、その重要という大切さがわかった。社会人になるためにも必要だということを理解した。  
○教育の必要性を改めて理解した。生徒の頃は、考えたこともなく、やらされているという感じだったが。  
○人間として成長するために、教育が必要だということを改めて知ることができた。授業を受けて良かったと思う。

教育の重要性のみならず、社会人になるための必要性を改めて認識している。また子どもの成長との係り、親・環境との係りなど、子ども・教育・環境の係りについても学ぶなど、広く深く問題を捉えていることがわかる。さらに自己の生き方にも繋げて、教育の必要性を考えることもある。「自分が受けてきた教育があらためて必要、重要だったことがわかった。今も大学で授業を受けているので、大切にしたい」と、教育について考える機会が日常的ではないこと、改めて教育を見直し、学修を自分自身の問題として捉える機会となっていることがわかる。

#### (4) 自己の仕事、チーム学校関連の学び

ここでは「仕事・職」というキーワードがあるもの、また「チーム・連携」というキーワードがある回答を示す。授業においては教師の仕事関連についても内容として取りあげられるが、教師以外の子どもに関する職業<sup>5)</sup>も学修するなど、学生は自己の職業選択を知る機会としても受け止めている。

- 学校の先生になってみたいと思った。
- 教員という仕事に興味を持つことができた。
- 教員の仕事を理解することができた。将来、職に就いてみようかなとも思った。
- 子どもに係る仕事で教員以外の職もあることを知った。卒業後の進路に考えてみたい。
- 少年院の先生に関心を持った。私もなってみたいと思う。
- この授業を学んで、自分は子どもに関わる仕事に就きたい。
- 子どもや学校に関わる仕事が多々あることを知った。
- 子ども、学校に係る仕事がたくさんあることを知ってよかった。自分の将来の仕事として考えてみたい。
- 子どもに係る仕事に就きたいと思った。
- 子どもを中心とした仕事で、連携しての仕事もあることを知った。
- 学校現場以外での子どもたちの姿を知ることができた。教員以外でも私たちにできる支えがあるかもしれないと、選択を広げられたたくさん考えられた。
- 子どもに関する仕事がいっぱいあり、それらの人が連携して仕事に取り組んでいることがわかった。
- 教師が一人で仕事をするのではなく、連携、他に係る仕事を知ることができた。
- スクールカウンセラー以外の人も学校に居ることがわかった。協働する大切さを知る機会となった。

教職の理解及び仕事に就く希望、また教育に関する、子どもに係る職の存在・理解、職に就く希望等を広め高める機会となっていることがわかる。このことは子ども、学校に関するキャリア教育の役割もここで担っていることを示している。反対に言うと教育・子どもに関連する職を知る機会を、今まで得ていなかったということを語っている。「子どもに関する他の仕事が多々あることを知った。先生と他の仕事の人と一緒に仕事をする大切さも知ることができた」と、多職種を知ること、そしてその連携の重要性、「チーム学校」の一端を理解するなどをしていることがわかる。

#### (5) 子どもの環境関連の学び

学びや子どもの環境について、理解をしていることもある。「環境」「大切さ」などのキーワードから、まとめる。

- 子どもや家庭の環境によって学びの質が変わることを知った。
- 学習環境の大切さ。
- 現代の子どもが置かれている環境がわかった。虐待なども同じだと思う。
- 昔の、子どものおかれていた状況を知ることができた。今の子どもの環境についても学んだと思う。
- 子どものおかれている環境、家庭の大切さを学んだ。
- 家庭の貧困と子どもの育ちについて考えた。

子どもの育ちや学習は、家庭、学校、地域、友人などの周りの環境から、大きく影響を受ける。これらのことを、学生は学んでいる。中世時代の子ども・教育の状況、戦前の子ども・教育の状況、今日の現状や課題を含めながら、子どもを取り巻く環境について理解をしている。

#### (6) 自分の専門分野への勉強関連の学び

教養教育の意味として、専門教育に必要な基礎的な内容の学修も担っている。この教育学は、これからの専門の教育へどのように有益性をもたらしているのだろうか。「これからの学び」「役立つ」関連のキーワードで示されている回答から考える。

- 教育学を受けることで、これまで学んできた子どもの福祉などさまざまなことと関連付けることができそうだ。教育について考えることも多く、興味を持ったり解決するべきこともたくさんあると感じた。これからの学びに役立つと思う。
- 心理学を学習していると、不登校の子ども・非行少年等とそのサポートについて聞くことが多いため、「こんなに手厚いサポートがあるのなら、学校で教育が無くとも、大丈夫そうだ！」とこの講義を受ける前は思っていました。しかし学校では、部活、勉強からしか学ぶことのできないことがたくさんあること、そういった不登校の子どもたちも本当は学びたい！という気持ちがあること、権利のこと等さまざまなことを知り、これからの専門の学習に役に立つ。
- これからの専門(心理学)を学ぶことに役立つと思う。ここで学校や教育を学んで、子どもの現状について学んだことは有益であった。
- 広く教育、社会のことを学んだと思う。自分の専門の学習に役立つと思うし、これからの大学での学習にも役立つと思う。
- 教職を希望しているので、勉強になりました。これからの学びの基礎としていきたい。
- 心理学を専門とするが、学校のこと、子どものことを学び、それをこれからの専門として学びたいと思った。
- 教職は履修していないが、子どもに関心があるので学んでいきたいと思う。これからの学びに役立つような授業であった。
- 大学における今後の学びに役に立つと思う。

授業では、子ども、学校に係ることを一般包括的に学修するので、上級学年で学修する福祉、心理学などの専門教育に関連づけて、自ら専門とする教職課程やその他の専門教育を学ぶうえでの専門の基礎科目としての学修になっていることがわかる。専門教育への興味関心、新たな知見、具体的な方法等の学びを学生に与えている。今後の学修の学びへと繋がっており、そのための基礎としての役割をも担っている。

#### (7) 自分の大学生生活、これからの学修関連の学び

専門教育以外の学修等にも有益性をもたらすことは、存在するのであろうか。「これからの学び」に注目しながら、回答から示されたことをまとめる。

- 大学でいろいろなことをこれから学ぶが、学びの意味などを知ってこれからの学習にとってよかったと思う。

- 今までは数値的な学力をあげるくらいで、将来役に立つのかよくわからなかった。勉強というのは生きるため、生活をするために必要なものであるということがわかりました。
- なぜ学ぶのかなどと考えたことがなかった。これを考えていながら勉強をしていきたい。
- 教育はさまざまな面で、今後の学びに役に立つと思う。これからも考えていきたいと思います。
- 大学生生活に役立てていきたいと思います。
- ものごとの考え方を学んだ。これからの勉強、大人になったときに役に立つ。
- 教育は自分の問題だと思った。これからも学んでいくので、この授業で学んだことを生かしていきたいです。
- 自分の大学生生活に役立てていきたい。勉強の大切さを知ったし、高校までの覚えるだけの勉強とは違った意味での学びの意味を知ることができた。
- 教育はこれからも続くので、教育を考える機会になった。一生懸命に取り組むべきだと思った。
- 大学で、これからもちゃんと勉強をしようと思う。自分のためになることだと改めて考えた。高校までの勉強の目標と違うことを知ることができた。
- 教育の意味を考えると、自分自身の問題であることをよく知ることが出来た。

これからの大学における学修、大学・社会生活に影響を与えている。これは学びの意味・考えから、自分の問題とする意識の向上、学びに対する意識の向上などを学修している。「教育は変わり続けるものだと感じた。しかし今の教育は本当に正しいのかわからないと感じてしまう。教育は社会に出ても必要なので、これからも学んでいきたい」「人は一学生び続けることが大切と思う」など、学びに対する学生自身の意識に変化もみられることもある。そして自分自身の問題として、将来に向けての学びの必要性を認識している。

## 5. 教養としての「教育学」の意義

### (1) 学修の広がり

授業は、これまで述べてきたとおり、設定した授業目標はもちろんのこと、それ以外にも履修している学生に対して、さまざまな学修効果をもたらしており、それをここで具体的に示すことができた。また「大学等における今後の学びに役立つようにする」という学修の目的の具体的な内容を、明らかにすることができた。加えて授業を担当する教員としても想定外の学修効果がみられた。「授業自体が、教育方法としての学修になった」という学生の意見もあった。「教え方やできない人に教えるときのポイント」「先生の話し方は、大学の先生にはめずらしく、高校の先生の授業のような話し方、進め方だと思いました。私は高校教師を目指しているので、自分が授業をしたら、どうやって進めるか、授業を受けながら参考になりました」「こんなに巻き込まれた授業は始めてでした。先生の話し方はとても優しく、聞きやすく面白かったです」と、授業の教え方や伝え方などについても学修する機会となっている。

次のような学びも示されていた。「教育とは何か。どういう意味があるか、さまざまな問題について知ることができた。とくに問題について自分で考えるようになった」と、課題に対して能動的に考察する態度の醸成である。また「教育の大切さ、ともに生きることの意味など哲学的なことも考えて深い講義でした。これまで自分が受けてきた『教育』というものを初めて客観的に見る経験は面白かったです」と、自分に係る課題を客観的に捉えるなど、客観視できる力の修得の機会となっている。

このように授業のねらい・目標で掲げた点以外にも、自己のキャリアの形成、専門教育の基盤としての役割を担い、教育の重要性やこれからの学びに対する意識変化等が学修の成果として現れている。このような学修の内容は、今日の社会から求められている社会人として必要な力の一つである。また「これからの大学生活にも必要な姿勢を見つけることができた」と、これから大学における生活、学修における何らかのヒントをこの授業では学びとっているなど、学修は多くの面で広がり深まりを提供している。

### (2) 教養教育科目「教育学」の意義

教育学は、教養教育において、多面的複合的に学びを提供する授業にもなりうることが示された。ということは、他の授業にも有益であるばかりではなく、学修の基礎をなす授業科目として、カリキュラムにおける基礎的なコアとしての授業科目になり得ると、学生の学修結果から示すことができる。「大学で何をどのように学ぶのか」「何のために大学に入るのか」「どのような道に進むのか」など、日比谷(2009)が示すようなアカデミックプランニングを行っている大学もすでにあるが、教養教育科目としての教育学はこれらの内容をも担うことができよう。

このように教育学の授業は、教養としての教育、大学生としての学びのための・生活のための学修として有益な役割を果たしており、大学教育の基盤として、高大接続教育としての学修として位置づけられることができよう。そして、このような内容の教育が、今日の大学教育では必要ではないだろうか。

近年、アクティブラーニングの授業方法の導入等が叫ばれるなど、教育方法の改善はこれからもますます進展すると思うが、そもそも学生は大学において学ぶ意味をどのように捉えているのだろうか。自ら考え判断するなどの学修が求められる大学・社会において、学びの意味・内容を学生自身で問い直す必要が今こそあると考える。このことに、教養としての教育学は有効であり、大学でこの学ぶ意義を学修することは、その後の学修において必要不可欠であるまいか。

授業実践例をもととして述べてきたが、これまでの自己の授業実践がどのように有益性を学生にもたせているのかという問いと分析、自己の授業は学生にどのような有益性をもたらすのかを見直しながら、筆者自身も含め授業担当者は授業を改善していかなければならない<sup>6)</sup>。

以上のように授業は、教養教育、専門教育を問わず、学生のさまざまな面に学修効果を与えている。これらのことは、通常実施されている授業評価では明らかにされにくい内容であるが、私たち授業担当者は、上記のことを踏まえて授業を展開することを忘れてはならない。最後に学生の意見を記す。「授業で学んだことは教育があるべき姿を考えようとする姿勢だ。自分は教師を志望していることから、専門知識や関連資料どれも参考になり、『自分は子どもとどのように係ろうか』と考えることができた。一方で、教育を専門分野としない人も、将来子どもをどのように教育しようかと考えられる内容だったと感じている。どのような人にも教育学を伝えられるようにしようというアプローチの仕方も学ぶことができた」と。

#### 注

- 1) 大学によって異なるが「一般教育」「教養科目」「全学共通科目」等を含み、ここでは教養教育の用語を用いる。
- 2) 井門富二夫(1991)「大学のカリキュラムと学際化」玉川大学出版部」では、学際教育と一般教育等で論じられている。
- 3) 実際の授業を行う際には、毎回授業の「前回の振り返り」「本時の要点」「ワークシート」「次回の項目、それまでの予習すべき事項」「復習すべき事項」を記入したプリントを毎回配布している。また約半数回の授業では、授業に関連ある映像を10分から30分程度を用いるなど工夫を重ねている
- 4) 平成27年度の15回目の授業終了時(平成28年1月22日)に、授業を履修している学生に協力を依頼した。「この授業で学んだこと」(自由記述式)を中心として提出を求めた。回答数は48であった。なお、履修している学生の学科所属は特定の学科ではなく社会科学系の複数学科である。
- 5) 児童相談所職員、法務教官、養護学校寄宿舎指導員、

実習助手、介助員、学校事務職員など。

- 6) 『IDE』No.515では、「学習させる大学」の特集がなされている。「教員が教育の改善に努力する必要があることがようやく認識された」と記述されている。

#### 引用文献

- 日比谷潤子(2009)「リベラルアーツ教育の深化」『IDE』NO.515 p.49.  
文部科学省生涯学習政策局政策課  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1343946.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1343946.htm))
- 佐野秀行(2006)「初年次教育の意義と有効性(1)初年次教育の有効性」『IDE』NO.486 pp.72-76.
- 山下英明(2014)「首都大学東京の全学共通教育と教育改革」『IDE』NO.565 pp.31-35.
- 山下仁司(2013)「学生の成長とこれからの教学改革の在り方」『VIEW21』pp.24-25.
- 吉田文(2014)「戦後の一般教育課程とその桎梏」『IDE』NO.565 pp.13-14, 19.

#### 参考文献

- 茅野理子(2006)「教養教育における体育実技の意義に関する考察」『宇都宮大学教育学部授業実践総合センター紀要』29, pp.421-430.
- 藤原政行(2016)『教養としての教育学』北樹出版久.
- 保田 祐歌(2013)「大学におけるジェネリック・スキル教育の意義と課題」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』33, pp.63-70.
- 森田啓(2010)「大学における教養教育としての体育と外国語～体育と外国語教育の可能性～」『Seijo English monographs』42, pp.207-232.
- 日本学術会議日本の展望委員会知の創造分科会(2010)「提言 21世紀の教養と教養教育」.
- 志水幸(2010)「社会福祉学専門教育における教養教育の意義」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』17, pp.43-52.
- 安岡高志他(1999)『授業を変えれば大学は変わる』プレジデント社.

# The Significance of Learning Pedagogy as a ‘Liberal Arts’ Subject

Jun SHIRAISHI

**Abstract** : Government standards say that, “when organizing the curricula, a university shall give appropriate consideration to fostering a wide-ranging and in-depth general education and ability to make comprehensive judgments, and to cultivating a rich humanity.” While there are different views on liberal arts education, it is becoming more important than before from the viewpoint of responding to a diverse student body. One is tempted to ask, however, how specifically classes of liberal arts subjects are proving useful to students who have actually taken the classes of the liberal arts subjects. This question was the reason for setting the above-mentioned topic. Practical aspects of the classes of “pedagogy,” a liberal arts subject, is taken up herein to consider the role that should be played by liberal arts education.

The classes of “pedagogy,” the liberal arts subject, have had a lot of learning effects on students. Having learned pedagogy has allowed the students to deepen their understanding of the need of education for humans, and their understanding of the environment surrounding children, etc. The students also believe that learning pedagogy is useful for their subsequent studies at their university, with some saying that taking the subject has allowed them to obtain basic knowledge for their specialized studies, such as in psychology.

**Key Words** : Liberal arts, Higher education, Education method, Significance to learn, Class evaluation